

年輸入軌條は總金額二百八萬八千五百三十二弗にして一噸の價格二十六弗五九に相當す。

(T K 生)

雜記

○北海道の鐵道 客月二十九日札幌に於て開催せられたる北海道廳、北海道鐵道管理局及北海道に於ける輕便軌道諸會社等の官民合同一千哩記念祝賀會を舉行せる北海道鐵道の沿革竝に現勢を左に摘記すへし。

北海道の鐵道は去る明治十一年十月時の開拓使長官故伯爵黒田清隆君本道開拓の目的を以て炭礦開鑿及び鐵道敷設を企畫し開拓使廳内に炭礦開鑿事務掛を置き山内提雲氏を掛長に松本莊一郎氏を副長に任命し翌年二月米國鐵道技師クロフォード氏を備聘し明治十三年一月手宮幌内間鐵道の建築に着手し同年十一月手宮札幌間二十哩一鎖先つ開通し明治十五年十一月幌内迄三十三哩六十二鎖の工事完成せり。

之より先き明治十五年二月開拓使廢せられたるを以て鐵道事務は工部省の直轄となり次て明治十六年二月工部省亦廢せられたる結果農商務省の所管に移り更に明治十九年一月北海道廳の管理經營する所となり明治二十一年十一月郁春別支線四哩三十九鎖の開通を見たり。

超えて明治二十二年十一月新に創立せる北海道炭礦鐵道會社は幌内郁春別等の炭礦及び同區間の鐵道全部を總額三十萬圓十箇年賦にて拂下を受け其後線路の延長に着手し明治二十四年七月より翌年十一月迄の間に岩見澤空知太間二十五哩二鎖、砂川歌志内間八哩七十六鎖、輪西岩見澤間八十三哩四

十七鎮、追分夕張間二十七哩七十二鎮合計百四十五哩三十七鎮の營業を開始し、明治三十年輪西室蘭間十哩十七鎮を敷設せり、所謂元炭礦線是なり。

其後政府は拓殖の進運に伴ひ更に樞要の地點に鐵道を敷設するの必要を認め、明治二十八年帝國議會に諮り空知太旭川間鐵道の建設を決し、別に翌年議會の協賛を経て北海道鐵道敷設法を公布し、將來建設すへき線路を豫定して第一期線を五百六十二哩第二期線を四百四十二哩と規定したり。

一方に於ては着々新線工事の進捗するに従ひ、空知太旭川間三十六哩四鎮は明治三十一年七月より、旭川落合間は明治三十四年九月より、旭川名寄間は明治三十六年九月より、釧路帶廣間は明治三十八年十月より孰れも營業を開始せり、所謂元北海道鐵道部線是なり。

曩に官設に決したる豫定線の内、函館小樽間の鐵道は函樽鐵道會社後に北海道鐵道會社と稱に於て敷設の許可を得たるを以て同社は明治三十五年六月其工を起し、明治三十七年十月全線百五十八哩の開業を爲し、茲に初て函樽間陸上交通機關の完成を見るに至れり、所謂元北鐵線是なり。

以上の如く北海道の鐵道は官設及び北海道炭礦、北海道鐵道の二會社に分屬したりしか、鐵道國有法の公布により炭礦鐵道會社は明治三十九年十月、又北海道會社線は明治四十年七月政府之を買收して官業に移し、全道の鐵道は鐵道作業局の下に統一管理せられ、其後官制の改正に伴ひ明治四十年四月帝國鐵道廳に移り翌四十一年鐵道院の所管に歸し以て今日に及へり。

鐵道國有後に於ては明治四十年九月落合帶廣間開通して函館釧路間延長四百五十七哩の全通を見、其後池田陸別間は明治四十三年九月、深川留萌間は同年十一月、陸別野付半間は明治四十四年九月、名寄恩根内間は同年十一月、野付牛網走間は大正元年十月、恩根内音威音府間及び野付牛留邊藥間は同年十一月、五稜廓上磯間は、大正二年九月、瀧川下蘆別下富良野間は同年十一月、留邊藥下生田原間は、大正三年十月、志文萬字炭山間及び音威音府小頓別間は、同年十一月、下生田原社名淵間は、昨年十一月より夫々營

雜 記

業を開始せり、尙此間函館に船車連絡棧橋を造營し本土との圓滑なる連絡交通に資する所ありたり。
北海道鐵道の現在營業線は

函館本線	函館旭川間	二六五・四 ^哩	歌志内線	砂川歌志内間	九・〇 ^哩
上磯輕便線	五稜廓上磯間	五・四	手宮線	小樽手宮間	一・七
幌内線	岩見澤幌内間	八・五	岩内輕便線	小澤岩内間	九・三
	幌内太幾春別間	四・五			
室蘭本線	岩見澤室蘭間	八六・七	夕張線	追分夕張間	二七・二
萬字輕便線	志文萬字炭山間	一四・八		紅葉山楓間	三・〇
留萌線	深川留萌間	三一・一			
釧路線	釧路本線	一九四・〇	富良野線	下富良野旭川間	三三・九
宗谷線	旭川小頓別間	九〇・〇			
網走本線	池田網走間	一一二・〇	湧別輕便線	留邊桑社名淵間	二六・一
留邊桑輕便線	野付牛留邊桑間	一四・二			

にして此延長九百四十五哩二分を算し本年十一月開通の豫定なる宗谷線小頓別中頓別間十六哩五十一鎮湧別線社名淵下湧別間十哩十八鎮を合すれば將に一千哩に達せんとするなり。
又現在北海道民有鐵道線路専用線を除くは左の如し。

會社名	開業區間	開業哩數	未開業哩數
苫小牧輕便	苫小牧佐瑠太間	二五・〇八 ^哩	
美唄鐵道	美唄沼貝間	五・一一	
定山溪鐵道			一七・五七 ^哩

北海道興業鐵道

(以上輕便鐵道)

函館水電

上川馬車鐵道

札幌市街軌道

江別人車軌道(村營)

札幌軌道

登別溫泉軌道

愛別馬車軌道

清幌軌道

(以上軌道)

○電氣學會講演會

客月二十五日(木曜)午後六時より京橋區西紺屋町東京地學協會々館にて電氣學會講演會を開き工學博士桂辨三君の「電氣製鐵及製鋼に就て」と題する講演ありたり。

○日本鑛業會臺北講話會

日本鑛業會にては、臺灣勸業共進會の開催を機とし、去四月末第四回講話會を臺北に開き、工學博士五代龍作君外二十一君渡臺せられたり、其概況左の如し。

四月二十八日 午前六時基隆に上陸、商船會社樓上に於て工事部川上博士の基隆築港に關する説明あり、小蒸汽船にて港内築港現狀を視察し、夫より水族館を觀覽し、轉じて田寮港に赴き、炭車にて木村組の經營に係る炭礦の新一坑及び鐵工所等を巡視し、十一時半木村氏邸に於ける午餐會に臨み、一同渡臺

函館區内

函館區新川町龜田郡湯川村間

旭川區内及應栖村

札幌郡平岸村同郡藻岩村間

札幌區内

院線江別驛と江別川及石狩川堤防間

札幌區北六條札幌郡篠路村間

院線登別驛登別溫泉間

二七、七〇

五、四九

三、二八

五、二八

六、七三

六、一四

〇、三二

六、五〇

五、三一

六、七四

六、〇〇